

タイトル	ディルタイ「シュライヤーマッヒャーの生涯」 (1870)における„Bildungsroman“ およびその類義 語の用法について
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(193): 35-51
発行日	2024-03-27

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870) における „Bildungsroman“ および その類義語の用法について

北 原 寛 子

1870年に発表された『シュライヤーマッヒャーの生涯』Leben Schleiermachers¹は19世紀半ばから20世紀前半にかけて活躍したドイツの思想家・哲学者ヴィルヘルム・ディルタイの代表作の1つである²。ヴィルヘルム・ディルタイは1833年にマインツのライン川対岸に位置するビープリッヒで牧師の家に生まれ、1911年に没した。大学では当初ハイデルベルクで神学を学んだが、さらにベルリンなどで歴史学や哲学の研鑽を積み研究者となる道を歩んだ³。

彼がこの著作で研究の対象としたフリードリヒ・シュライヤーマッヒャーは18世紀の終わりから19世紀前半にかけて活動した神学者である。ディルタイはシュライヤーマッヒャーの遺稿を整理するなどの仕事に携わり、書簡集の編纂もおこなっている。ディルタイは研究対象の人物について、人生行路が思想形成に深い影響をあたえているという研究姿勢をとっており、思想的な発展の過程を知るために伝記的な事実や当時の思想的背景などについても多くの頁を割いている。またシュライヤーマッヒャーが1796-1802年にベルリンのシャリテー病院で牧師を勤めて

¹ 使用した版は次のとおりである。

Wilhelm Dilthey: Leben Schleiermachers. Erster Band. Auf Grund des Textes der 1. Auflage von 1870 und der Zusätze aus dem Nachlaß. Hrsg. von Martin Redeker. Erster Halbband (1768-1802). Gesammelte Schriften. XIII. Band. Erster Halbband. Zweiter Halbband (1803-1807). Gesammelte Schriften. XIII. Band. Zweiter Halbband. Walther de Gruyter; Berlin, 1970.

このトイプナー社(当初)から出版されていた26巻組全集からの引用を示す場合はGSと略記し、巻、頁を併記する。『シュライヤーマッヒャーの生涯』のように前半・後半で分冊になっている場合はそれぞれI・IIとして巻と頁の間に記す。

ディルタイのテキストがその後と与えた影響を考察するためには、1870年の初版を分析するのが適当と思われる。今回第三版に当たるこの全集を採用した理由は、まず初版と第二版の違いが明示されているからである。さらにこの全集は現在広く利用されておりディルタイ研究の底本となっていることも理由に挙げられる。1870年版は各地の図書館やデジタル化資料を確認したが、入手困難であった。

² Vgl. Francesca D'Alberto: Diltheys zweites Hauptwerk: „Leben Schleiermachers“. In: Gunter Scholtz (Hg.): Diltheys Werk und die Wissenschaften. Neue Aspekte. Göttingen; V&R unipress, 2013, S. 13-21.

³ ディルタイの伝記については、以下を参照した。

Matthias Jung: Wilhelm Dilthey zur Einführung. 2., vollständig überarbeitete Aufl. Hamburg; Junius Verlag, 2014.

Hans-Ulrich Lessing: Wilhelm Diltheys Einleitung in die Geisteswissenschaften. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2001.

いた時期にロマン派の詩人フリードリヒ・シュレーゲルらと親しく交友したこともあり、当時の文学をめぐる状況についてもさまざまな記述がなされている。

『シュライヤーマッヒャーの生涯』は、フリードリヒ・シュライヤーマッヒャーが1768年に従軍牧師だった父の勤務地であるブレスラウで生まれてから、プロテスタントの敬虔な独自の流派であるヘルムフートの教育施設で学び、やがてそこから自らの意思で離れたのちにハレ大学で神学を専攻し、啓蒙主義の影響を受けつつプロテスタントの牧師として活動していくようになる過程を描いている著作であるが⁴、ドイツ文学研究の観点からすると、Bildungsroman という用語が初期に使われていることで重要な文献の1つとなっている。

ディルタイがBildungsroman という語を使用している例は、このほかに『詩と体験』(1906)に見られる。その著作においてディルタイはレッシング、ゲーテ、ノヴァーリス、ヘルダーリンという4人の詩人を伝記的側面と作品の成立を関連付けて考察しており、Bildungsroman という概念を用いて『ヴィルヘルム・マイスター』の影響を受けて創作された作品や、あるいは類似の題材を扱っているとみなすことができる一連の作品が認められることを主張している。具体的には、次のように記されている。

ヒュペリオンは、内面の文化にむかうわたしたちの当時の精神の方向からルソーの影響のもとにドイツで出てきたBildungsromanに含まれる。ここに、ゲーテやジャン・パウル、テークのシュテルンバルト、ノヴァーリスのオプターディンゲンやヘルダーリンのヒュペリオンにならって、継続的な文学ジャンルが登場したのだ⁵。

テキストから読み取ることができるディルタイのBildungsromanの定義は、このように「ヴィルヘルム・マイスターの影響が感じられる作品」と緩やかである。Bildungsromanは前半「形成／陶冶／教養／教育」Bildungs-と後半「小説」-romanが組み合わされた複合語で、ディルタイは前半・後半それぞれを他の語に置き換えた類義語を合わせて使用している。それはBildungsgeschichte（「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildungs- +「歴史／物語」-geschichte）、Entwicklungsroman（「発展」Entwicklungs- +「小説」-roman）、Entwicklungsgeschichte（「発展」Entwicklungs- +「歴史／物語」-geschichte）などである。さまざまな組み合わせによる複合語が同じ作品を指して使用されていることもテキストを検討すると確認できる。ディルタイは、『詩

⁴ この著作は未完であり、著者の生前に出版された部分はシュライヤーマッヒャーの生涯のうち最初の39年間にあたる1768-1807年までである。これらがディルタイ全集13巻I・IIに収められており、全集14巻I・IIは続きを執筆するためにディルタイが手稿で残した資料をマルティン・レデカーが編纂した巻となっている。ディルタイは著作は、超大な構想を持ちながらも、次々湧いてくるアイデアのために別の著作に取り組んでいるうちに未完に終わり、第1巻しか発表されないことが重なったため、「第1巻の男」というニックネームがあったという。Vgl. H.-S. Lessing, o. o. A, S. 15.

⁵ GS26, 252.

ディルタイ『シュライヤー・マッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

と体験』を編纂して出版した20世紀初頭の時点では、Bildungsromanを他の用語と区別して用いる特別な意図がなかったといえるのである⁶。

Bildungsromanという語の歴史的な用例についてはフリッツ・マルティーニの有名な研究があり、19世紀初頭のドルパートの美学教授モルゲンシュテルンにさかのぼれることが明らかになっている⁷。しかしモルゲンシュテルンのテキストが同時代へ及ぼした影響力はほとんどなく、1961年に「再発見」されるまで、いわば書庫の中で埋もれているような状況であった。一方でディルタイのテキストの影響力は大きく、多くのBildungsromanに関する文学研究では彼の名前が上げられている。また言及されていない場合でも、用語や文章の言い回しなどからディルタイの影響が強く推察できる場合が多い。通常Bildungsromanの歴史的な経緯を探求する場合は、ディルタイが提起したように、ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795/96)⁸からの影響関係で考えられる場合が多い。『マイスター』以前の作品にさかのぼり、ブランケンブルクが1774年に発表した小説理論書や、ブランケンブルクがその著作で当時のもっともすぐれた小説と称賛したヴィーラントの『アガトン物語』(1766/67)、さらにはグリーンメルスハウゼン『ジンプリッティシムスの冒険』(1668)までさかのぼり、作品の系譜として捉えるのである。こうした考察方法は、『マイスター』を端緒として作品の共通点に依拠しながら、演繹的にジャンルを構築して成果を上げてきた。しかしながら、ディルタイの記述を批判的に検討する過程がまだ不十分であるといえる。まずはディルタイのBildungsroman概念規定がどれほど妥当性があるのかを検討する必要があるはずである。『マイスター』の影響のもとに成立した作品は、文学史的な事実を鑑みればたしかに多数認められる。しかしその影響を過剰に見積もり、ディルタイの主張の妥当性を検討することが先延ばしになってきたのではないだろうか。そこで本論は、ディルタイはどのようにしてBildungsromanという概念を用いるにいたったのかについて考えていきたい。どのようにして彼はこの概念を思いついたのだろうか。なぜディルタイはこの概念を提起したのだろうか。どのような思想的な文脈でこの概念はテキストに登場したのだろうか。ディルタイに決定的な示唆を与えた何かがあるのか、それとも彼の独自の発想なのかについても検討する必要がある

⁶ 『詩と体験』におけるBildungsromanの用例については、次の研究で考察をおこなった。

Vgl. 北原寛子「ディルタイのヘーゲル小説理論受容——19世紀におけるBildungsroman概念展開についての一考察——」, 小樽商科大学編『人文研究』第130輯(2015), 139-158頁。

この研究において、ディルタイがヘーゲルの『美学講義』における小説理論を継承しつつ、その表現をわずかに書きかえて自著に取り込んでいることを明らかにした。ディルタイによる文言の改変はわずかであるが、解釈に与える影響は大きなものであった。18世紀の小説理論は、ブランケンブルクやその他多くのテキストを経て徐々に形成されヘーゲルに引き継がれたのだが、ディルタイはそれを詩人の内面的な活動によって突発的に創出されたと解釈するのが妥当なように書き変えてしまったのである。彼は先行する小説理論の伝統を意図的に歪曲したのではなく、「生の哲学」に沿って再発信したに過ぎない。しかしこの改変によって18世紀前半から続いていた小説理論の議論が断絶することになった。

⁷ Fritz Martini: Der Bildungsroman. Zur Geschichte des Wortes und der Theorie. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Stuttgart: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1961, Bd. 35 (1), S. 44-63.

⁸ 引用に含まれる場合を除いて、本文では以下『マイスター』と略記する。

ある。ディルタイが Bildungsroman という複合語を文学作品に適用するにいたる過程を、『シュライヤー・マッヒャーの生涯』のその他部分のテキストを分析することで探求することが本論の目的である。

1. 類義語の用例

Bildungsroman という複合語について具体的な意味を確認しておきたい。先述したように、この語は「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildung と「小説」Roman の2語からなる複合語である。Bildung は動詞 bilden を名詞化した語で、原義はものの形を作ることにあるため、「形成」に相当するといえる。しかし何を形成するのかによってこの語の意味は文脈に応じて多様に解釈できる。18世紀後半に Bildung について深く考察したヘルダーは、「祖先はどこで知識や好みや習慣を手に入れたのだろうか。こうしたものは何でどれくらいわずかしかなかつたのだろうか。すでにぐるりと、世界やその続きの世界はこの好みと習慣のために、その神の模範という静かで強力で永遠の直観によってのみ形成され sich bilden, しっかりと形作られた festbilden のだ」⁹と記述している。この主張の根底にあるのは、神が人間を形作った bilden というキリスト教が示す人間の起源である。18世紀のドイツでは、このような議論をへて「形成」Bildung が人間に適用される時、神に倣って人間性を高めるという意味に解釈されるようになった。個人を形成するとは個人を育てることであるので「教育」の意味を含み、知識や能力の開発のみならず人格を洗練させるという点では「陶冶」を意味し、さらに教育の結果身に付く態度や知識などの「教養」も一語で内包している。Bildung の指し示す内容がとてども広範なため、日本語で対応させるためには「形成」に加えて「陶冶」「成長」「教養」「教育」など、文脈に応じて解釈することが必要になる¹⁰。

ディルタイの思想史の特徴は、「生の哲学」Philosophie des Lebens と呼ばれる対象へのアプローチ方法である。対象となる人物の精神的な深化・発展をその内的感情やそれを引き起こすきっかけとなった出来事との関連から探求することを試み、伝記的な事実のみならず同時代の思想的背

⁹ Johann Gottfried Herder: Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit. Hrsg. von Hans Dietrich Irsmscher. Stuttgart; Reclam, 1990, S.9f.

¹⁰ 論者は Bildung は多義的であり、謎の多い語と考えていた。そのため、2023年9月にウィーン大学で開催された某研究会にて、18世紀文化が専門のドイツ人研究者と談笑している折に、「18世紀の Bildung は世紀半ばと終盤で質的な変容が起こっていないか、中期はそれほど理想化された意味は持たないで教育と同義語で用いられることが多いのに、1790年代になると至高の理想への到達を目指す陶冶へと変化しているのではないかと数ある疑問のうちの1つについて尋ねてみた。すると彼の答えは「それは誰を対象にして bilden するかによるのではないか、子どもを対象にするか、大学生・成人を対象にするかで、Bildung の内容は変化する」であった。つまり多義的な Bildung のグラデーションを当然のこととして受け止めており、多様な意味の広がりや区別することはできないという立場を示したのである。ドイツ語母語話者の Bildung 解釈の一端を知り、日本語で究極の一語に対応させて考えることは不可能なのかというあらたな課題に直面した次第である。そこには日本語で Bildung を文脈に応じて訳し分けなければならないからこそ Bildung が多義的であると解釈してしまうのではないかという問いも含まれている。そしてまた、ドイツ語話者に彼らの考える Bildung が玉虫色の変化を含んでいることを明白に指摘する必要があるのではないかとこの考えも同時に浮かんだ。

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

景にも大きく注目してふんだんに盛り込むというスタイルである。この方針について、『シュライヤーマッヒャーの生涯』では初版の前書きに次のように記している。

私はシュライヤーマッヒャーのすべての人生の本質を内実に即して描き出してみたい。彼の発展史 *Entwicklungsgeschichte* や彼が只中に生きたその大きな精神的運動とのかかわりを、である。ここからおのずと生じる彼の人生観や世界観の包括的な理由付けを、その根本から彼の先人たちの成果へと発展したものを、もっともわかりやすい形に単純化して、つまり理念と状況に基づいた人生の本質の作用を描きたいのである。(GS13/I, XXXVf.)

ディルタイはとある思想を理解するために、その思想を世に出した人物が過去や同時代の思想からどのような影響をうけていたのかという点に関心を寄せるとともに、その人物の個人的な体験も思想を理解する大きなヒントになるという立場をとっている。ディルタイは、研究対象となる人物がどのように生きてきたのかということをしづれた思想を生み出すための道程として捉えており、その過程を知ることが思想の本質に迫るための重要なステップになるとみなしているのである。

ディルタイが自著の方針について説明しているこの箇所注目したいのは、「発展史」*Entwicklungsgeschichte* という語である。上述のように、伝記的に示される事実の積み重ねが思想形成の過程として重要な役割を与えられているため、研究対象の人物のさまざまな経験は、成長のプロセスとして「発展史」の一環ととらえられるのである。これは著作全体のキーワードの1つであるため、かなりの頻度で繰り返して用いられている。そしてまたこの語は *Bildungsroman* の類義語の1つである。ディルタイはこの箇所では *Bildung* ではなく「発展」*Entwicklung* という語を用いている。「発展」*Entwicklung* は「形成／陶冶／成長／教養／教育」*Bildung* と質的に異なるとする意見はたしかにある。たんなる伸張や拡大を示す前者にたいして、後者にはヘルダーが念頭においていた神に似たものとしての完成を目指す意味での成長という重い意味が込められており、本質的に異なるとする見解である。ディルタイは伝記の叙述を通じてシュライヤーマッヒャーの思想の本質に迫ろうと試みているので、もし「発展」*Entwicklung* が *Bildung* と区別されるとすればこの語を研究対象の人物に安易に用いることはないはずである。よって「発展」*Entwicklung* にも理想を目指すあくなき成長の意味が込められており、神の似姿を目指す意味に解釈されることもある「形成／陶冶／成長／教養／教育」*Bildung* と同義で用いられていると断定できるのである。シュライヤーマッヒャーの活動に関して言及している次の文、「どのようにしてシュライヤーマッヒャーが精神的な発展 *geistige Entwicklung* へとより深く迫るのかは、完遂された活動の驚くべきほど多彩さの背後にある粘り強い安定性を見るとわかる。私が言いたいのは、彼の中にある意識とはっきりとした脈絡との明白な秩序から湧いてくる彼の精神の効率のよさのことなのだ」(GS13/I, 270) と述べている箇所においても、「発展」

Entwicklung は「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildung と同義で用いられている。たしかにここで引用した部分には「発展」Entwicklung の前に「精神的な」geistig という形容詞が付加されている。これはどの分野の「発展」なのか、人間の「発展」のうちで身体にかかわることなのか、知識にかかわることなのか、「発展」する可能性のある領域が多数考えられるなかで精神的な分野における「発展」であることを強調する役割を果たしている。このように形容詞が添えられているとはいえ、ディルタイが Entwicklung と Bildung に質的な差を想定していないことが文脈から読みとれるのである。

複合語である Bildungsroman や「発展史」Entwicklungsgeschichte の類義語に目を向ける前に、ディルタイの「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildung の使用法をいったん確認しておきたい。彼はこの語を特定の意味に限定することなく、一般的な語としてさまざまな文脈で用いている。ものの「形成」の意味で解釈すべき例をいくつか取り上げて検討していきたい。

最初に初版の前書きとして記された文章の一部から例をとりたい。この書物がどのような方針で著されているのかを読者に解説しているなかに次のような行がある。

晩年になってようやく驚嘆すべき思慮深さでもって、シュライヤーマッヒャーはカントの批判的な成果に依拠しつつ、世界調和の宗教的直観にあらゆる世界観を具体化する中で与えられる意味を明白に認識して、彼の世界観の単純な基本線をスケッチしたのである。世界の関連を文学的に把握するという魔法は、この基本線にあるのではない。そうではなくそれはすべての世界観の運動要因と形成史 Bildungsgeschichte への深く誠実な洞察なのである。それは彼の批判的な精神にとっては、経験の成果なのである。(GS13/I, XLI)

ディルタイはこのように、研究対象の人物であるシュライヤーマッヒャーの伝記を知ることが、彼の思想の深淵を把握するために不可欠であると繰り返し主張している。この箇所でも用いられている語のうち「形成史」Bildungsgeschichte は、Bildungsroman とは複合語の後半部分である「小説」-roman が「歴史／物語」-geschichte に置き換わっているのみであり、類似語の中でもとくに近い語といえる。しかし表面上の類似性とは裏腹に、その表している内容はさまざまな世界観がどのように形成されたのかという来歴に関することであり、ここでは「形成史」と解釈するのが適切であろう。『詩と体験』では Bildungsgeschichte が Bildungsroman を言い換えた表現として同じ作品を指して使われている例があり、この2つの語はディルタイのテキストでは非常に近いこととみなすことができる。文学概念の同義語であっても、文脈によっては文学作品を指しているのではなく、「何かが形成されていく経緯、その歴史」として読まなければならないのである。ディルタイは Bildungsgeschichte を特殊な用語としてではなく、普通の名詞として扱っており、自身の主張を構成するためのパーツの1つとしていろいろに使いこなしているのである。

さらに別の例文を取り上げてみよう。『シュライヤーマッヒャーの生涯』においては、シュライ

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

ヤーマッヒャーに大きな影響を与えた思想家としてシャフツベリーとスピノザも大きく取り上げられているのだが、シャフツベリーを解説する箇所ディルタイは次のように記述している。

しかしわれわれはまた、部分が全体のために目的の一致によって組織されているようなすべての有機体を体系とみなさなければならない。この有機的世界は植物や動物において活動している形成の力 *Bildungskraft* を示しているのである。この有機体をとおして、自然はわれわれをあらゆる教育の中でも教えようとしているのである。だからわれわれにとっては、自然の認識可能な統一的な機構は、自然に内在している芸術的に作用する形成の力 *Bildungskraft* の証拠なのである。(GS13/I, 173)

ここでも *Bildung* は「力」*Kraft* という語と結びついて複合語として用いられている。この文脈において「形成」*Bildung* する対象は自然である。キリスト教では自然も神による創造物であり、人間と同様に *Bildung* されるべきという解釈をすることもできるかもしれない。しかしディルタイの議論はそのような一元論的な世界観に基づいてはおらず、人間精神のあらゆるものに対する超越をむしろ強調する立場であり、二元論的といえる。そのため、人間の内面にかかわることではなく、自然という外的なるものにたいしても *Bildung* が適用されるということは、この語が多様性を内包していることを示しているに他ならないのである。

次の *Bildung* の用例も興味深いので取り上げておきたい。人間にかかわることで用いられているが、精神にかかわる話題ではない。

この世に生まれ出ること、つまり身体を形成 *Bildung* することからそれが無となるまでのわれわれの最高の原動力と身体的な運命の間には、パスカルがわれわれの状況を位を奪われた王の状況と比較した時に強調した偉大さと哀れみのあの対比がある。(GS13/I, 513)

この文は、人間が精神という最高の原動力を備えていながら、肉体的には有限でやがて死すべき定めにあることを表現している。精神と身体に質的な差があることが強調されており、身体は *Bildung* はたしかに人間にかかわることはあるが、内面的なことだけではなく肉体的にかかわるので、ものと同様に「形成」の意味で解釈するべきである。このようにディルタイによる *Bildung* の使用例は、人間の内面の形成にのみかかわる特殊な場合だけではなく、その身体形成についても適用されている。さらに思想や自然の形成にいたるまで範疇に含む広い意味を持った言葉であり、極言すれば普通の名詞として用いられているだけである。今日の文学研究で *Bildungsroman* は、その精神性の陶冶がいかにか高尚か、いかにか理想にむかって尽力するかを問題にする場合があるが、そうした議論はディルタイに続く論者たちに見られるだけであり、すくなくともこの議論の直接の起源をディルタイの用例に求めることはできないことがテキスト分析

からはいえるのである。

『シュライヤーマッヒャーの生涯』のいろいろな箇所を検討して、「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildungが特殊な用語としてではなく、普通名詞としてさまざまな文脈に当てはめられていることがわかったが、同じことが「発展」Entwicklungの場合でもいえる。Entwicklungには、Bildungのような理想化された人格完成の意味が文化史・思想史的に与えられているわけではない。だが先に引用した箇所では、シュライヤーマッヒャーの人格が成熟にむけて上昇的に変化する過程を「発展史」Entwicklungsgeschichteと呼んでいたように、ディルタイはこの語を人格の成長、精神の成熟などの意味で用いていた。一方で次のような用法もテキストから見つけ出すことができる。シュライヤーマッヒャーがハレ大学に赴任してから親交を結んだノルウェー出身のヘンリク・シュテッフェンスについて説明している箇所である。

取り組んでいた鉱物と化石において、彼 [= シュテッフェンス] は地球の発展史 Entwicklungsgeschichte の証拠を見つけた。歴史のまさにそのような発展 Entwicklung を探し求めることをレッシングが彼に教えたのである。スピノザの抽象的な物質の対極に、彼は自然がいたところで個性に基づいているのを見たのである。(GS13/II, 113)

自然にも個性があると表現されているが、それは鉱物と化石の多様性を示すための擬人化された修辞である。あくまでのこの部分では地球の地理上の歴史の変遷が念頭に置かれている。ディルタイは人格にかかわることがらでも、それ以外の自然やものにまつわることがらでも、少なくとも Bildung や Entwicklung については区別をせずに、それぞれを文脈に合わせて自由に用いている。Bildung や Entwicklung, さらにそれらを含む複合語が使用されたさまざまな文をこのように検討してみると、ディルタイはこれらに特殊な概念としての限定をつけたり、特別な意味をもたせてはいないということがわかるのである。それよりもディルタイは同じことがらを多様な語彙で表現することを重視していたようにさえ思える。これにとっては概念を細かく規定して議論をすることよりも、あらゆる語を駆使して主張の核心を叙述しようと努力しているのである。

ここまで Bildungsroman の類義語としての Bildungsgeschichte と Entwicklungsgeschichte について確認してきた。ディルタイは複合語の前半 Bildungs-/Entwicklungs- を構成している「形成／陶冶／成長／教養／教育」Bildung と「発展」Entwicklung について、それぞれの文脈に合わせて臨機応変に同義語として用いていることを十分に見ることができたと思う。そしてこれらの語が複合語の後半「歴史／物語」-geschichte と組み合わせられた場合も、議論の流れに応じたさまざまな解釈が求められることも明らかになった。

ディルタイがいかにこれらの複合語を自由に使っているのかということは、複合語の後半が「行程」-gang に置き換わっている例をみるとより一層明白になることであろう。その例として、まずこの著作のなかでもっとも重要ともいえるシュライヤーマッヒャーと同時代の詩人・思想家と

の影響関係について論じた次の箇所からの一節があげられる。

われわれはここで、フリードリヒ(・シュレーゲル)の試みがフィヒテの成果と結びついて、シュライヤーマッヒャーの陶冶の行程 Bildungsgang に画期的に関わった地点に到達した。(GS13/I, 251)

この引用の前後では、著作の「主人公」とでも呼ぶべきシュライヤーマッヒャーが、ベルリン時代にロマン派の詩人たちとの交流により自らの思索を深めていったことが表されている。ディルタイにとっては、もっとも力を込めて主張すべき箇所になっているといえ、そこでこの「陶冶の行程」Bildungsgang という語が使われている。しかしながら、だからといってこの語が他と比べて格段に高い意味を付与されているかという、そういうことではない。やはりこの語も多様な言い換え表現の1つに過ぎず、特別な意味を求めるわけにはいかないである。

ここまで取り上げてきた例で、ディルタイがいかに多くの複合語を文脈に合わせて創り出してきたのかということが明らかになってきたであろう。そうすると Bildungsgang と同様に Entwicklungsgang も使われているのではないかと予想できる。実際にその語は次のような文に見つけることができる。

この運動はプラトンの時代のそれとなんとという類似性を備えていたことだろうか！

かつてもこの時代も、詩的文学的運動が哲学的体系を担っていた。文学と芸術が直接表現する世界の意味と美を、哲学者たちは神的な世界基盤にある条件へと引き戻したのである。哲学的な構造と散文を完成させるまで、それらが美的な基本の調子を担ったのである。

しかしこのことがらそのものの根底に深く根付いていた類似性が哲学的な発展過程 Entwicklungsgang そのものにも及んできたのである。(GS13/II, 39)

ディルタイは、18世紀末から19世紀初頭の文学と哲学を巡って、この2つの分野が密接に関連している状態がプラトンの時代と比肩しうると説明している。この時代は若きシュライヤーマッヒャーが思想を形成した重要な時期であり、ロマン派の詩人たちが哲学的な思索に深くかかわったことも示唆されている。上の引用部分はディルタイが著作全体で言わんとする主張の一端を明白に見て取ることでできる箇所であるが、そこで「発展過程」Entwicklungsgang という語が、この時代の哲学がどのような道を経て変わろうとするのかを表現するために用いられている。先に上げた「陶冶の行程」Bildungsgang がシュライヤーマッヒャーの人格的・思想的進化という内面にかかわることを示していた一方で、ここに例で引いた「発展過程」Entwicklungsgang は事象にかかわることを対象にしているのも、言い表していることからは質的に異なっている。発想を逆転させるならば、性格の異なる分野であっても、ディルタイはそれぞれの用語を文脈に適用

させながら主題の核心に迫っていているといえるのである。

このように『シュライヤーマッヒャーの生涯』には、Bildungsromanの後半部分「小説」-romanが類似の語「歴史／物語」-geschichteに入れ替わったBildungsgeschichteがさまざまな箇所で見られており、それらの解釈も文脈に応じて柔軟に変化させる必要があることがわかった。さらにEntwicklungsgeschichte, Bildungsgang, Entwicklungsgangなど、複合語の前半と後半がいろいろに組み合われた用語が使われており、それぞれが議論に自在に適用されていることも見えてきた。ディルタイはそれぞれの語を厳格に規定して区別するなどのことはしておらず、どの組み合わせでも結局のところディルタイが主張しようとする「生の哲学」、つまり思想を思想家の人生経験から探求するという目的を実現させるための手段としての役割を与えられているといえるのである。

2. 『シュライヤーマッヒャーの生涯』におけるBildungsromanの用例

『シュライヤーマッヒャーの生涯』では、シュライヤーマッヒャーという実在の人物の人生経験を指してBildungsgeschichteやEntwicklungsgeschichte, Bildungsgangなどの複合語が自在に用いられていることがわかった。そしてそれらの語は人格の成長以外にも、事象の進展や自然の推移など、何かが変わる過程を表現する文の中で使われていることも確認できた。こうしたさまざまな類義語が使われているなかで、Bildungsromanは本文中に1回のみ、以下の記述に登場している。

レッシング、ゲーテ、シラーの全作品のうちでただヴィルヘルム・マイスターのみが、そのような影響力を当時の若い詩人世代にたいして勝ち得ていた。そうなのだ、今日にいたるまで、私たち国民の詩的想像力に、私たちの偉大な時代の他の労作でこの小説ほど深く影響を与えたものはないのだ。私はヴィルヘルム・マイスターの流派をなす小説を（というのもルソーの類似の芸術形式はそこまで影響しなかったからだ）Bildungsromanと名付けたい。ゲーテの作品は、さまざまな段階、人格、人生の時期における人間の訓練Ausbildungを示している。この作品は、世界全体をその誤った発展や存在を巡る邪悪な情熱の戦いも含めて描き出しているわけではないので、満足した安心感で満ち溢れている。(GS13/I, 299)

思想家の精神を探求するために伝記的な描写を重視し、それをBildungsgeschichteやEntwicklungsgeschichteなど多様な類義語で表現していたディルタイにとって、主人公の人生行路を題材にする小説を指し示して、複合語の後半を「小説」-romanに変えてBildungsromanと呼ぶことは、議論の自然な延長線上にあるといえる¹¹。Bildungsromanという語はここにしか使用

¹¹ ディルタイが著作の基本姿勢として堅持する思想家の個人的経験をとおしてその思想の形成過程を探求し本

例がないのだが、だからといって何か特別の思い入れや、特殊な用語としての緊張感は感じられない。ディルタイはさまざまな複合語の前半と後半を自在に入れ替えて議論していたので、この引用された箇所にも Bildungsroman が新しく登場しているにも関わらず、これまでの類義語のヴァリエーションに紛れて目立たないほどである。上の引用箇所から次の頁に続くと、さっそく Bildungsroman は Bildungsgeschichte という使用頻度の高い類義語に入れ替えられている。それに加えて「芸術家小説」Künstlerroman という概念まで添えられている。

恋人が登場する中で、最初は一緒にいられるが、姿を消してからはきわめて多彩な人間関係や緊張感がでて、最後に再会するときかなり運命的な結末を迎えるという、このような陶冶の物語 Bildungsgeschichte には古典的な幸福な題材は、まったく新しいものではないけれども、ヴィルヘルム・マイスター以来小説家たちの想像力にあたかも自然とそうなるかのようにとても深く刻み込まれている。ジャン・パウルが唯一芸術的な意図をもって書いた小説である『巨人』の発想も、こうした作品の仲間である。

このようにして芸術家小説 Künstlerroman が集まってきた若い詩人の間で広がり始めた。(GS13/I, 300)

このようにさっそく Bildungsroman は類義語 Bildungsgeschichte へと置き換えられている。これまでテキストを実際に分析してきたように、ディルタイは実在の人物の伝記的な叙述を指して Bildungsgeschichte, Entwicklungsgeschichte, Bildungsgang, Entwicklungsgang などの語を適宜用いていた。一方で Bildungsroman は文芸作品にのみ適用されており、実在の人物の来歴に適用することを避けているようにみえる。しかし反対にフィクションの作品にはためらいなく Bildungsgeschichte の語が当てはめられているのである。つまり使用例からは、Bildungsgeschichte はフィクションでもノンフィクションでもいずれかの限定なしに幅広く意味に含むことができるが、Bildungsroman はフィクションの作品にしか適用できないと推測することができる。そしてフィクションの作品の作品群には、「芸術家小説」Künstlerroman¹² という新たな類義語も用いられている。ディルタイは複合語を自由に組み合わせることでその都度文脈に応じた複合語を作成しているようである。このように非常に自由に用語を紡ぎ出しているため、類似する語が何をどのように指示しているのか、文脈に応じて適切に判断する必要がある。そして特別

質的な理解をうるという方法は、ブランケンブルクが『小説試論』の中で小説に求めた主人公の変化する過程を心理面から描き出し、読者に成長の本質を分かりやすく伝えるという小説の特性と並行関係にあるように見える。しかしこれはディルタイの思想の根幹にかかわる大きな課題だといえるので、ここでは簡単にその点について指摘するにとどめ、本格的な検討は別の機会に譲りたい。

¹² ドイツ文学の研究の研究では、主人公が芸術家として活動する題材を扱う小説を「芸術家小説」Künstlerroman と呼んでいる。1866年にはF. W. ハックレンダーによる同名の小説作品が出版されており、この概念は Bildungsroman と同程度の歴史があるといえる。

な概念として発展的に規定して使用しようとするならば、別の類似の表現で言及されている箇所と照らし合わせて慎重におこなわなければならないだろう。

ディルタイが『マイスター』を非常に高く評価していたことは、『シュライヤーマッヒャーの生涯』の記述のあちこちからはっきりと読み取ることができる。たとえば、研究の主題であるシュライヤーマッヒャーは、フリードリヒ・シュレーゲルに出会う前から『マイスター』を読み、主人公をとおして個人の内面「陶冶」に接して感銘を受けていることが指摘されている。(Vgl. GS13/I, 179, 227) 先に Bildungsroman が用いられている箇所を引用したが、そこにある「ヴィルヘルム・マイスターの流派をなす小説」という表現は、ロマン派の詩人たちの業績に直接触れているディルタイには省くことのできないことばだったと推測できる。フリードリヒ・シュレーゲルはマイスター論によって18世紀後半の文芸批評における金字塔を打ち立てているし、ノヴァーリスは当初『マイスター』に傾倒したものの、やがてそこに詩的なものと相容れない世俗的なものを感じて反発を抱くようになり、『マイスター』の一对となるべき詩的な作品として『ハインリヒ・フォン・オプターディングン』を執筆したなどの事実があるからである。またディルタイはこうしたロマン派の動きを後世に伝えた立役者の一人であり、研究を先駆けたといえる。そのためロマン派の詩人たちが『マイスター』に刺激されて思索や詩作に取り組んだことをこの小説に関連付けてとらえようとするのは納得できる。ディルタイは『マイスター』がドイツ文学で果たした先駆的な役割について、次のようにも指摘している。

ドイツで誰よりも先んじて世界を他の人とは違うようにその偉大な目に反映させていたゲーテは、論理的様式がまだ周知されていなかった形式に彼の最初の散文作品であるヴィルヘルム・マイスターを最初に与えたのだった。そして彼の同時代人たちに、彼の文学上の登場人物たちを彼らが飛び出してきた哲学的な世界観へと引き戻させることを可能にしたのだった。そうなのだ、これは彼の手紙やスケッチ、会話を目の前にしたわれわれにとってようやく、しっかり確実に許容されたことだった。(GS13/I, 85)

ディルタイは、『マイスター』が出版された当時、小説が「まだ周知されていなかった形式」であると指摘している。実際、小説は18世紀初頭からドイツでは反道徳的で怠惰を誘発し、非合理的な話しか書かれていないという非難を多く受けていた¹³。『マイスター』の画期的な点は、これ

¹³ 18世紀ドイツにおける小説批判については、次の研究で考察をおこなった。

Vgl. 北原寛子「18世紀ドイツ小説理論についての一考察 ゴットシェート『文学批判試論』を手がかりに」、小樽商科大学言語センター編『言語センター広報 Language Studies』第21号(2013)、21-29頁。

北原寛子「『近代的叙事詩』としての小説 — 近代小説理論の展開から読む J.K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』—」、阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第56号(2015)、5-27頁。

北原寛子「ゴットハルト・ハイデッガーの小説批判 — 17世紀末の小説論争についての一考察 —」、小樽商科大学編『人文研究』第133輯(2017)、59-77頁。

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

らの批判を克服して小説に文学としての地位を保証したことである。しばしば『マイスター』がドイツ近代小説の端緒であるという主張がなされるが、それは『マイスター』以前に小説作品がなかったわけではなく、小説への激しい批判・非難の嵐を跳ね返せるほどの圧倒的な評価を受ける作品がまだ知られていなかっただけなのである。

ディルタイは『マイスター』という作品がそなえている魅力について、つまり何が同時代人たちのところにそんなにも大きく響いたのかということについて、次のような意見を表明している。

真の人間的な人生の理想については、われわれは詩人の恩恵を受けている。ゲーテの思考様式は人生を自由で大きく観察したところから発して、それはまさにこの頃ヴィルヘルム・マイスターにおいて最初に読者たちに伝えられたのだった。とある個人の陶冶 Bildung がこの作品の題材であり、人間の個性の多様性についての自由な喜びがその基本的な雰囲気である。この作品において、直感的な形式で人生観が示されたのだった。その人生観は、それまでの道德哲学の限界が認識していないものだった。「すべて私たちの外にあるものは——と、生活規範的陶冶 Bildung の最も高次の典型としてマイスターの後ろに立っている叔父の美しい言葉をここに繰り返すのだが——「ただの要素にすぎない。そうなのだ、こうも言っていないかな、私たちにかかわるものはすべて、とね。でも私たちの深いところにこのそうあるべきものを作り出すことのできる創造的な力が潜んでいるのだよ。そしてそれを私たちが、自分たちの外か自分自身にそれやあれやのやり方で表現するまで休ませてはくれないのだよ。」(GS13/I, 264)

ディルタイは『マイスター』の素晴らしい点として、当時の道德哲学の限界をも超える自由でおおらかな人生観を挙げている。しかもそれが読んですぐわかるような優しい言葉で書かれている点についても称賛を惜しまない。ナターリエたちの叔父がヴィルヘルムたちに語った言葉を引用しながら、自分たちの精神には創造的なエネルギーが宿り、それを自分自身や外に向かって放出させることができるというたくましい生き方が、つまり新しい時代の求める個人の陶冶 Bildung の理想像がわかりやすく具体的に示されていたことが当時の読者に新鮮に響いたのではないかという解釈を示している。

ディルタイは、『マイスター』が個人の「陶冶」Bildung を主題とすることについても言及している。18世紀の終わりからディルタイの時代にかけて、Bildungsroman という複合語がまだほとんど使われていなかった段階から、小説は個人の「陶冶」Bildung を詳細に描くべきだという議論は多くあったことはたしかである。ディルタイがさまざまなテキストを引用している規模と範囲から推測して、彼がその議論を知っていたことは確実であろう。『シュライヤーマッヒャーの生涯』にはこうした文化的な背景もあり、それが彼の複合語を編み出す力強い勢いで Bildung を題材とする小説を目の前にして Bildungsroman へと結実したのだという考えることも十分可能で

あろう。

『シュライヤーマッヒャーの生涯』のなかで Bildungsroman ただ1回しか用いられなかった理由については、3つの原因が考えられる。まず、それはこの語がすぐさま Bildungsgeschichte や Künstlerroman と言い換えられてしまったがために、再び用いられる機会を逸してしまったのかもしれないということである。多くの類義語の中で埋没してしまったような形が考えられる。次に、類義語と比較して、特別の意味が与えられなかったことも影響しているかもしれない。特別な語でなければ、なめらかな文の流れのために、わざわざ同じ語を単調に繰り返すことはしないはずだからである。最後に想定できる理由は、小説が登場人物の「陶冶」Bildung を描くことについてはディルタイも議論しているように当時は当然の主張であったので、複合語として反復する必然性を感じていなかったのかもしれないというものである。いずれにせよ、ディルタイがいろいろな語を組み合わせる類似の複合語を作り出していたからこそ、「陶冶」Bildung を描く小説のために Bildungsroman という語がするりと生み出されたのである。ディルタイは、小説が個人の「陶冶」Bildung を題材するべきだという当時の議論をしっかりと引き継ぎ、実在の人物であるシュライヤーマッヒャーの「陶冶の歴史」Bildungsgeschichte を記述する中に、ドイツ文学研究に大きなインパクトを残す一語を颯爽と一瞬だけ登場させたのである。

3. その他の Bildungsgeschichte の使用例の系譜

本論では『シュライヤーマッヒャーの生涯』について、集中的に Bildungsroman とその類義語である Bildungsgeschichte などの語がどのように使われているのかを確認しているが、テキストを詳細に分析すると、限定された条件の中でも、これらの語が使用されている背景に別のテキストからの影響を認めることができる。例えば、この著作の中に取り込まれたフリードリヒ・シュレーゲルがシュライヤーマッヒャーに宛てた手紙の一節がそれに該当する。

シュレーゲルは「プラトンの作品の歴史的な位置づけと成立史 Bildungsgeschichte」を探していた。これは根底には指図と受け止められる。彼はシュライヤーマッヒャーに選択された位置づけについての「公式の見解」を求めていた。(GS13/II, 55f.)

ここに引用した箇所には全集の編者によって注で書簡の出典が示されており、フリードリヒ・シュレーゲルがシュライヤーマッヒャーに送った手紙の一節にさかのぼることができる¹⁴。つまりここに含まれる「成立史」Bildungsgeschichte はディルタイが書いた語ではなくて、フリードリヒ・シュレーゲルが書いたことばが引き写されただけなのである。この語をディルタイが『シュ

¹⁴ Wilhelm Dilthey (Hg.): Aus Schleiermachers Leben. In Briefen. Bd. 3. Berlin; Georg Reimer, 1861, Berlin; Walter de Gruyter & Co, 1974, S. 174

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

ライヤーマッヒャーの生涯』で繰り返し使用していることは先に指摘した通りである。しかしそれだけでなく、それから70年ほど前にもフリードリヒ・シュレーゲルがすでに用いているのがわかる。ここで詳細に取り上げることはしないが、実際にフリードリヒ・シュレーゲルの著作にはBildungsgeschichteという語が非常に多く使用されている¹⁵。

繰り返し指摘しているように、ディルタイは考察の対象となる人物の来歴を思想形成の過程として重視しており、それを思想内容とともに並べて叙述しようとしていた。彼の代表作である『精神科学序説』(1880)の前書きでこの方針を著者自ら申し述べている箇所では、Bildungsgeschichteの類義語であるEntwicklungsgeschichteが用いられている。

われわれの硬直した生得的な認識の財産を受け入れるのではなく、われわれの存在の総体から生ずる発展史Entwicklungsgeschichteのみが、われわれみな哲学にたいして向けるべき質問に答えるのである。(GS1, XVIII)

このように述べ、ディルタイはこれまでの書籍とは異なる対象へのアプローチである発展史Entwicklungsgeschichteの解明によって、哲学が自分たちの課題の多くに答えてくれるはずであるという予測を立てている。それほどまでにディルタイの思想においては、Bildungsgeschichte、あるいはEntwicklungsgeschichteなどの類義語で示される人生の過程が重要なキーワードになっているのである。

4. おわりに

ディルタイは「生の哲学」という解釈学の方法を掲げて研究を進めていた。それは考察の対象となる思想について、それを思索した人物の来歴や文化的・思想的背景を考慮することで、生きた人間のまざまざとした実感をも含む思想体系に迫りたいという熱い思いから選択された手段であった。この研究方法に基づく著作では、おのずと考察対象となる人物の形成史Bildungsgeschichteに注目することになる。ディルタイはこの人物の形成史Bildungsgeschichteを、EntwicklungsgeschichteやBildungsgang, Entwicklungsgangなどの類義語を総動員して表現していた。これらの語はテクストを分析して検討すると、特別な規定をされた用語ではなく、それぞれが交換可能であり、特殊な概念というよりはほとんど普通名詞として自然や思想、身体といったいろいろなことからの変化の歴史を指し示すためにも使用されていることがわかった。ディルタイはこれらの語を何度も反復しながら議論を進めていたのだが、ディルタイが「生の哲

¹⁵ ディルタイはしばしばヘルダーの名も挙げている。シュライヤーマッヒャーやフリードリヒ・シュレーゲルをはじめとする当時の思想家にたいするヘルダーの影響を除いて考えることはできない。BildungsgeschichteにはヘルダーのBildung論から続く影響関係を探ることができるかもしれない。しかしこの課題も本論では深く立ち入らず、今後へと送ることにしたい。

学」で実践しようとしたことを文学作品の題材に見出したので、それらの作品を Bildungsroman と呼んだのであった。しかしこの Bildungsroman という語でさえ、彼の記述の中では特別なタームではなく、他の類義語で交換することが可能であった。発想を逆転させれば、デイルタイが類似の複合語をいくつも使っていたからこそ、Bildungsroman という語も瞬発的に登場したともいえる。18世紀後半以来、小説は登場人物の「陶冶」Bildungを描くべきできであり、それによって読者に行動の教科書となる規範を提供するべきだという議論が数々の論者たちによって重ねられてきていた。こうした小説理論では、登場人物の「形成／陶冶」Bildungを如何に描くべきかという問題が繰り返し議論されていた。デイルタイは彼に先立つこれらの議論も踏まえたうえで、『マイスター』が発刊当時の人々に与えたインパクトについて解説していた。シュライヤーマッヒャーが一読者として受けた大きな印象についても記述されており、デイルタイが目指す「生の哲学」と、小説の可能性を示す『マイスター』の交わる点に、Bildungsroman という概念が創出されたと解釈することもできるであろう。

しかし、デイルタイの用語の使用法を見る限り、特別な意味を Bildungsroman に求めすぎるのは留意しなければならない。これまでのドイツ文学研究では、Bildungsroman は『マイスター』を軸とする作品史として捉えられてきた。それはデイルタイのテキストを元に、それぞれの論者が Bildungsroman を規定しつつ、このジャンルに含まれるべき作品を演繹的に選択して拡張していった研究の成果の積み重ねによるものである。だがこれはデイルタイのテキストが言い表す内容が正しいと仮定したうえで成立する議論であるといえる。今回ここでデイルタイのテキストを批判的に検討したが、デイルタイが Bildungsroman という概念を創出したのは、自らの進める実在の人物の Bildungsgeschichte にまつわる記述の鏡像のような対象を文学作品に見出したためといえる。であるから、Bildungsroman の概念的な発展に関する限り、その端緒は18世紀から続く個人の Bildung をどうとらえるのかという課題にあるといえ、それを記述する努力がデイルタイにおいて文学作品にあらためて見出されたこととらえることが可能なのである。この結論によって Bildungsroman 論が解釈対象の作品の内実と乖離したところで、主人公の陶冶 Bildung の成否を議論する傾向があることをある程度説明できるであろう。しかしこれを具体的に検討することは今後の課題としておきたい。

本論では、議論の途中でのちに取り組みとして挙げた課題がさらに2つある。1つは Bildungsroman を導き出した Bildungsgeschichte にさかのぼる問題である。Bildungsgeschichte という語は、『シュライヤーマッヒャーの生涯』に引用されているフリードリヒ・シュレーゲルがシュライヤーマッヒャーに宛てた書簡に見出せることを確認したように、フリードリヒ・シュレーゲルにもさかのぼっていくことができる。この語を頻繁に用いたシュレーゲル兄弟や、彼らに影響を与えたヘルダーの Bildung 論が、この文学ジャンルの成立にどのような寄与をしているのかを検討することである。

2つ目の宿題は、デイルタイの「生の哲学」にまつわる課題である。本論では、「生の哲学」に

ディルタイ『シュライヤーマッヒャーの生涯』(1870)における„Bildungsroman“およびその類義語の用法について(北原寛子)

由来する Bildungsgeschichte が、文学作品に接した瞬間に Bildungsroman という呼び名が出てきたことをテキスト分析によって確認したが、ひょっとするとそもそもは18世紀小説理論が現実の人間に応用されているのではないかと、つまりディルタイは「生の哲学」によって実在の思想家を主人公にした Bildungsroman を叙述しようとしているのではないかという課題である。ディルタイの言説はブランケンブルクのそれに重なる部分が多いが、ブランケンブルクが「生の哲学」へと発展する萌芽を喚起したということはないだろうか。

いずれの課題も Bildungsroman にまつわることであるが、それぞれが大きなテーマであるので、これから少しずつ取り組みを進めていきたい。

本研究は JSPS 「21K00440/2021 年度基盤研究(c)／19 世紀前半における Bildungsroman の継承と発展についての研究」の助成を受けている。

あわせて本研究は北海学園大学における 2023 年度在外研修における成果の一部である。

